

〈解答〉

- ① 1 「例」すばらしい景色が、自分の家の深く茂った森のせいで台無しになっている  
(33字)
- 2 きらんとせし
- 3 ア
- 4 ある君
- 5 オ

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

① 「梅園叢書」は、江戸時代中期の思想家である三浦梅園が著した随筆。3巻からなる書物で、儒教的な立場から古今の話題をとりあげ、著者の所感や論評を平易に述べている。著者の三浦梅園は、儒学と洋学の思想を調和させて宇宙の構造を説明する条理学を提唱した人物で、哲学・宗教・歴史・文学・経済をはじめ、天文・医学など、さまざまな学問や科学に通じていた。

1 傍線①の直後に「我があたりの樹の、眼にさへぎればこそ、かくは招き給ひつらめ（Ⅱ我が家のまわりにある樹木が、風景を見る主君の目を邪魔しているからこそ、それを見せるために私を、このように見晴らし台に来るようお呼びになったのだろう）」とあるのをヒントにまとめ。つまり、主君が自分を見晴らし台に来させたのは、自分の家のまわりにある樹木が見晴らし台からの眺めを邪魔していることに気づかせるためだ、ということに、その家臣は気づいたということである。

2 古文中にある助詞の「む」は「ん」と読む。ちなみに、本文の五行目にある「望むべし」の「む」は「む」のままであるが、九行目にある「何やらむ」の「む」は「ん」と読む。

3 「行く末」は「将来」「この先」の意味、また、「むづかし」は「嫌な感じだ」「わずらわしい」「めんどうだ」「うっとうしい」などと口語訳する。

4 傍線④の直前にある「右の事」は「前述のこと」という意味で、「ある君」から、家のまわりの樹木を切るよう間接的に促された「その臣何某」が、その要望に気づかないふりをして樹木を切らなかつたことを指している。その件を思い出した「ある君」は、「その臣何某」を賢くない愚鈍な家臣であると決めつけ、賢くないのだから悪いたくらみも考えつくことはあるまいと思つたということである。

5 何某という家臣は、「悪いたくらみを起こそうとしている」仲間を助けようとしてはいないので、アは誤り。また、イ「(何某という家臣が)悪いたくらみの中心人物ではないかと主君から疑われた」、ウ「主君が悪いたくらみを考えていた」、エ「何某という家臣は、主君への忠誠心が認められた」「取り調べを主君から命じられた」の部分が、それぞれ適当ではない。

〔大意〕

昔、ある君が楼（見晴らし台）を築き、これに登って（風景を）眺めていたのだが、あちらこちらの風景をこの上なくすばらしいと思つて見ていた。ただ、ある方向に（「ある君」の）家臣である何とかという者の家の森が深く茂つていて（その見晴らし台からのすばらしい風景を見る「ある君」の）目を邪魔していた。そこで（「ある君」は）、「あの（家に住む）家臣を呼びつけ（この見晴らし台からの風景を見せ）れば、彼は以前から賢い者であるので（私の望むことを）きつと推し量ることができると違いない」と思い、（その家臣を実際に見晴らし台に呼び寄せ、）「この見晴らし台から四方の風景を見てもらいたい」と言った。その家臣は（「ある君」の言わんとすることに）氣づき、「我が家のまわりにある樹木が（風景を見る「ある君」の）目を邪魔しているからこそ、（それを見せるために、私を）このように（見晴らし台に来るよう）お呼びになつたのだらう」と思つて、家に帰つてすぐに（家のまわりにある樹木を）切ろうとしたが、「いやいや（ちよつと待てよ）、主君の心をよく推し量ることが出来る者と思われてしまつては、これから先、困ることもあらう」と思つて、そのまま氣づかないふりをして（自分の家のまわりにある樹木を切らずに）放置していた。その後、（「ある君」の周囲で）ある悪いたくらみが起きたときに、賢い家臣たちは（主君である「ある君」から、悪いたくらみに加担しているのではないかと）疑いをかけられたが、この臣（≡自分の家のまわりの樹木を切らずに、放置した家臣）だけは、（「ある君」が）右の事（≡主君の気持ちを推し量る賢さをこの家臣が持つていなかったこと）を思い出しなさつて、（「あいつは賢くないから悪いたくらみを起こすこともできまい」と思つた「ある君」は）何の疑いもかけなかつたというのである。